

一人の声として 駒田晶子

今年の現代短歌評論賞が発表された。受賞作は三上春海「歌とテクストの相克」。評論賞の課題は「戦後短歌70年を現代の視点で考察する」であった。三上氏の論は、すつきりして読みやすく、内容に目新しさはないけれども、だからこそ、納得させられるものだった。二〇一四年に第五十七回短歌研究新人賞を受賞した石井僚一「父親のような雨に打たれて」の連作の描いた「父親の死」の世界は、全くの虚構だったことから始まった多くの議論。なぜ、短歌では虚構の是非が問われるのか。近代の斎藤茂吉は短歌を「文字を読んで心で聴く」ものだと考えていた。短歌をあたらしい局面に導いた塚本邦雄は「目からたましいへ、いかに深くくい入るか」と書いていた。近代に至るまでの音読という作業ではなく、識字率が上昇し、出版物の普及などにより一般化した黙読の習慣が、短歌を「生の声」から変化させた。ここ（近代）から、短歌のテクスト化が少しずつ進行していったのだ。しかし、短歌は歌である。歌声は発する「人間」によるものだ。声の向こうに「人間」を求める私たちの気持ちこそが「私性」を見出だしてしまうのである。短歌の歌声はまだここにある。わたしは、この論に浅く頷いた。塚本邦雄、穂村弘の名前が付けられているからこそ、虚構の世界だと納得、安心をして作品を読んでいるような気がしていたからだ。わたしも、たった一人の歌声として、短

歌を読んでいるのだろう。「戦後七十年」としての視点ではなかったけれど、短歌の沼の深さが感じられる数ページであった。

黒瀬珂瀾『蓮喰ひ人の日記』を読んだ。「短歌研究」に連載されていた頃は、目で追っただけだったけれど、一冊になり、読み物として、とてもおもしろかった。アイルランドの首都ダブリンから入り、ロンドンに暮らした十三ヶ月間の作品なのだが、連載始めに、作者はジェイムス・ジョイス『ユリシイズ』を読みはじめた。読者のわたしは『ユリシイズ』未体験なのだが、この一冊は歌集の中の一本の川となり、流れてゆく。作者の読みすすめてゆく読書に、歌集の読者が付きそう感覚。作者の実生活は、初めての子どもをロンドンで抱き、父親の顔も見せたりする。

トルコ系を中心に多民族の住人が集まり、街の清掃を始める。僕は信じる、多民族共生の力を。

∞／〇焼け焦げた二階建て店舗の跡を見上げてみると、テレビクルーが撮影を始めた。

オークリーフの緑まばゆく奪ひ取る愉悦が路地に落ちてみたのか「たぶんおれが悪いんだろう。息子が無い。ルーディ。今ではもう遅すぎる」(『ユリシイズ』)

まだ踏まぬ柔き足裏を見せながら唇より乳首こぼしてねむる異国で身近に迫った暴動。目の前には眠る子ども。読んでいる本の内容が、読者からみついてくる。詞書きと歌の距離が心地よく、少し難解な部分もある歌集一冊の構成は、よく練られている。十年以上前に一度見かけた作者の姿を思い出したりもした。そう、作者の姿を思うのだ。たった一人の声として歌集を読んできた。ゆくわたくし自身を、どうしようもなく意識していた。